

## 高橋 シズエさんの手記

2023年

元出家信者のこと

事件から28年が過ぎた今年になって、事件前に脱会したAさんは、時には涙を流しながら、出家信者だったときの話をしてくれた。

教団の中では、三悪趣(地獄、餓鬼、畜生という苦悩の世界)に落ちる恐怖や、何人もの死者が出て、「その人はカルマが落ちて高い世界に行った」と信じていた。いま思えば、「人の生死」への感覚が麻痺していたという。脱会しても、すぐにマインドコントロールが解けたわけではない。

地下鉄サリン事件が起きたときは、自分が恐怖を感じていた地獄どころじゃない大惨事だったから、もっと早く警察に動いてもらえば良かったのにと、何もできなかった後悔ばかりだという。Aさんは、サリンのことは事件後に知ったけど、考えれば思い当たる節があるらしい。教団の中にも悪事や犯罪を知らなかったし、おかしいと思ってもオウムの都合良い説明を信じ込まされていた。

そんなオウムの後継団体に、現在も入信する人が後を絶たないことに、私は恐怖を感じている。

(2023年10月8日記)

2022年

オウム裁判を傍聴していたとき、地下鉄にサリンを撒くまでの2日間の証言があまりにも詳細で、実はちょっと驚いた。実行役5人と彼らを送迎する運転手役の5人、そして現場の調整役、山梨県のオウム施設にいた教祖とサリン製造者たち。この15人だけでも行動は同じでなかったし、何日の何時ころに誰が何をしていたか、被告人たち皆が細かく証言した。

一緒に傍聴していた人に、「どうしてあんなに覚えているの?」と聞いたことがある。すると彼は「特別なことはよく覚えているものだよ」と言った。

いま私は、事件の日の出来事を鮮明に思い出すことができる。そう、3月20日は特別な日だった。街中の通りすがり、私が遺族だと気付いた人は誰もが、私に、「あの日、私は・・・」から話し始める。子供の卒業式で・・・お墓参りで・・・休暇を取ってはとバスで・・・被害者や遺族だけでなく、少なくとも地下鉄を利用していた人なら、あの日の戦場にも似た出来事を決して忘れることはできない。

(2022年11月1日記)

## 2021年

オウム真理教が起こした事件の刑事裁判は終わったが、オウム信者らは「Aleph」、「ひかりの輪」などと名称を変え、活動している。「Aleph」に対する被害者への損害賠償金、約10億2500万円の支払命令は、2020年11月に最高裁で確定した。ところが、「Aleph」は現在も、その支払に応じようとしていない。

被害者については、10年ほど前の「死者13人、負傷者5800人以上」というデータが記載されたままだが、オウム事件が一件落着であるかのような状態が、「Aleph」や「ひかりの輪」に、賠償責任のぞんざいな引き延ばしを助長させているように思えてならない。

遺族の哀惜はますます深く、被害者の心身に刻まれた後遺症は続いている。まだ事件は終わっていないし、民事賠償も済んでいないことを、オウム信者らはしっかり自覚してほしい。

(2021年11月30日記)

## 2020年

事件から25年の集会は、新型コロナウイルスのために中止になった。年ごとに若い参加者も増え、歴史の1ページになった惨事を語り、自分事として考えてもらう機会だったが、25年を機に見合わせるつもりでいたので、なんとも中途半端な気持ちになった。

精一杯やったけど、終わりよければなんとやら、私は何ができたのだろうと振り返った。

「どうか私たちのバトンを受け取って」と言った先で、まず公安調査庁で、こうした手記の掲載の場をいただいている。そして、毎年9月に坂本弁護士一家を慰霊する旅を実施している弁護士仲間は、若手の弁護士を同行して事件を語り継いでいるという。

私たちの集会、手記、そして慰霊の旅は、オウム事件再発防止の種まきになっていると信じている。

こうした私たちの真摯な活動に比し、「Aleph」とひかりの輪といえ、いまだに賠償金の完遂に消極的で、麻原教義で内向する。

様態も、事件当時のオウム真理教と少しも変わっていない。

(2020年8月22日記)

## 2020年

夫が殺された衝撃は重く、私一人だったら押しつぶされていたと思う。事件から15年経った日に放送されたドキュメントドラマの台本に、こんなナレーションがあった。「涙に暮れる遺族として日々を過ごしているころの姿はもうない。高橋シズエとして、今も事件と向き合い続けている」。

事件を起こしたオウムに、そして今も活動している信者たちに「怒り」を持ち続けているのは、被害者や遺族を支援してくださる弁護団の、故坂本堤弁護士の意志を継ごうとする「誓い」を強く感じているからだ。

転じて、夫はどうなのだろう、と思った。

先だって、間もなくお彼岸というある日、お墓を掃除していると、紳士が静かに近づいてきた。私がいなければ、人知れずお墓参りを済ませていたに違いない。名刺を差し出した紳士は、その後、現在の東京メトロの代表取締役役に就任された人だった。

夫の死、地下鉄サリン事件の衝撃、そして未だに不穏なオウム信者たちを、誰も忘れてはいないのだと思った。

(2020年1月6日記)

## 2018年「事件から24年」に際して

2018年7月6日、テレビの画面が一斉に特報に切り替わった。

麻原彰晃らの死刑執行だった。私は、かなり冷静だった。執行されたら会見をすることになっていたから、淡々と支度を始めた。

私にとっては、主人の「死」の衝撃以上のことは何もない。彼らは、元々知らない人たちだった。裁判を傍聴しても容易に理解できなかったし、会って話をしたこともなかった。

殺人と刑死、同じ「命を絶たれる」ことでも、決して同じではない。無残にも生きる権利を奪われた夫の「死」と、その罪を償うための「死」。

7月26日に行われた他の死刑囚らの死刑執行からも5か月経つ。いま私は、あの時ほど冷静

ではられない。執行後に出版されることが、必ずしも本人の意図ではないかもしれないが、次々と発刊される本から、彼らに関する個人的なことを読んで、一人の在りし日の物語として、涙を流すこともある。

「これでオウム事件が終わったわけではない」とよく聞くが、その先どうするかは見えてこない。彼らの償いの「死」も無駄にしてはいけないと思う。

(2018年12月16日記)

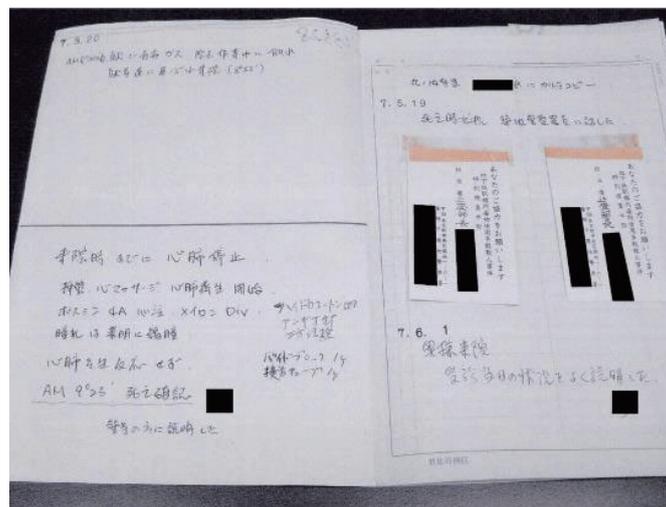
### 2017年「事件から23年」に際して

まさか地下鉄職員の夫が、職務中に亡くなるなんて想像もしていなかった。病院に搬送されたというので職場から急ぎ駆けつけた。長男がうなだれて座っている前には、冷たくなった夫の青白い顔があった。泊まり勤務だったこの前夜は、5月の結婚記念旅行を楽しみにしていると電話で言っていたのに。

検死が行われた警察で、翌日に司法解剖があるからと言われ帰宅した。身も心も混乱と緊張とで、頭や手足が一つの身体として機能しているとは思えなかった。

報道の取材攻撃はすさまじかった。朝から夜遅くまで、食事はおろか眠る時間すら削り取られた。ずっと後になって「オウム真理教の犯行だといつ知ったのか」と聞かれたことがあったが、覚えていない。

事件から15年を前に、夫が搬送された病院で偶然にもカルテを見る機会に巡り合った。書かれている文字に焦点が合わなかった。一緒にいた人が読んでくれた。事件から2か月半後に私が訪ねたことも書かれていた。



被害者・高橋一正さんのカルテ（高橋シズエさん提供）

事件から22年経って、ニューヨークにある9・11テロ事件の犠牲者の遺品が展示してある博物館を訪ねた。そこで、ある遺族が提供したという死亡証明書を見た。案内してくれた人が「ご遺体は見つかっていないけれど、殺人という欄にチェックしてあります」と言った。それから私の顔を見て、ハンカチを手渡してくれた。帰国後、私は夫の死亡診断書を探した。「有機リン化合物による中毒死」と書かれているのは覚えている。よく見ると「他殺」という小さな欄にチェックが入っていた。

どうして気付かなかったのだろう。受け取ったのは事件から8か月後。既に刑事裁判が始まっていて、被害者や遺族たちの民事訴訟も準備の真っ最中だった。

高橋一正さんの死体検案書（高橋シズエさん提供）

これまで一つ一つの問題を乗り越えてきたつもりだったが、思い返してみると、見落とししたり、気付かなかったり、やり残したことがいろいろあったのだ。地下鉄サリン事件で夫を殺されただけでなく、いつまでも心を揺さぶられる日々が続いている。

(2017年12月11日記)